

おとぎ話は終わらない

ミュリエル

シャノンの妹。

ヨシュア

シャノンとミュリエルの祖父で、ラング侯爵家の先代当主。

ベルナルド

ギネヴィア皇国の皇太子。

オリヴィア

『楽園』の上級生。学校行事である武術大会でヴィクトリアの対戦相手になる。

ランディ

ヴィクトリアのクラスメート。彼女が作った黒猫の魔導具を愛でる、大の可愛いもの好き。

リージェス

『楽園』の最上級生で寮長。寝坊の多いヴィクトリアを気にかけている。

シャノン

『楽園』の上級生。ヴィクトリアの後見を申し出たラング侯爵家のお坊ちやま。

ヴィクトリア

天涯孤独で後ろ盾のない平民の少女。学費、生活費タダにつられ、男の子の格好で魔術学校『楽園』に通う。目立たず過ごしたいのに、なぜか注目を浴びてしまい……

登場人物
紹介

第一章 『楽園』に入学しました

国立魔導具研究開発局附属の全寮制魔術専門学校——通称『楽園』に通う生徒の朝は、問答無用で早い。

起床時間は朝の六時。寮の最高責任者である寮長は、毎朝その時間になるときっちり起床の鐘を打ち鳴らす。

生徒たちはそれから十五分以内に、コの字型になっている寮の中庭に整列しなければならない。そこで朝礼が行われるのだ。

ちなみに朝礼の点呼に遅れた場合の罰則は、翌日から一週間のトイレ掃除である。たかがトイレ掃除とあなどってはいけない。

三つの棟からなる寮すべてのトイレが対象だ。数が多い上に、清掃業者のチェックは小姑レベルに厳しい。

このチェックをクリアするためには、自由時間がほとんど消えてしまう。

そのため、トイレ掃除の洗礼を受けた者は、二度と遅刻しなくなる。

そうささやかれる、伝統の罰則なのだが——

「……また、遅刻か。ヴィクトリア・コーザ」

「はい……。申し訳ありません」

寮長の冷たい声に答えたのは、今年の春『楽園』に入学したヴィクトリア。

初夏の風が爽やかに薫る今朝、通算八度目の遅刻という新記録を達成した。めでたくもなんともない話だ。

初回は無表情で、二度目は少々お怒り気味に、三度目はあきれ返った顔をしてトイレ掃除を命じた寮長、リージェス・メイヤ。

彼は今、非常に残念なものを見る目でヴィクトリアを眺めている。

リージェスはつやややかな漆黒の髪に深い藍色の瞳、メタルフレームの眼鏡が実にお似合いのイケメンだ。

彼にそんな眼差しを向けられるのは、精神的ダメージがかなり大きい。ヴィクトリアは、彼の美しい顔が好きなのだ。

もともと早起きだったのに、『楽園』に入学してからというもの、なぜか少々——否、ものすごく寝起きが悪い。ゆえに寮がひとり部屋なのをいいことに、三個の特大音量の目覚まし時計をセットしていた。

そのどれもが、実に破壊的な音量を誇っている。

にもかかわらず、ヴィクトリアは起きられなくて、こうして遅刻してしまう。そして恐らく、今後も寝坊する日があるだろう。

ヴィクトリアは反省しつつ、この学校に入学した経緯をぼんやりと思い出した——

ヴィクトリアが『楽園』に入学したのには、わけがある。

そのきっかけは、去年の冬。

南方の田舎町で小さな家庭用生活魔導具店を営んでいた母が、事故で亡くなったのだ。

馬車の前に飛び出した子どもをかばい、母が大けがをしたと聞いて、ヴィクトリアは急いで病院に駆けつけた。

ベッドに横たわりヴィクトリアの顔を見上げた母は、瀕死の状態とは思えないほどニヒルな笑みを浮かべた。

そして、ぐっと親指を立てて、のたまったのである。

——ふ……っ、わたし……カッコ、いい。

自画自賛するなり潔く天に召された母は、確かにカッコいい女性だった。ヴィクトリアは心の底から誇りに思う。

そういうわけで、母と二人暮らしだったヴィクトリアはひとりになってしまった。母以外に身寄りもなければ、頼るあてもない。

ヴィクトリアは途方に暮れた。幼い頃からずっと母の店を手伝っていて、これからもそのつもりだったのだ。

そしてゆくゆくは、取引先かお客さんの誰かから「ちょっといいひとがいるんだけど、どうだ

い？」と持ちこまれた縁談に乗っかる計画を立てていた。仮に相手がお金持ちではなくとも、つましく幸せに暮らす人生を夢見ていたのだ。

日曜学校で読み書きと計算の基礎は身につけていたし、魔導具に関する知識も母からいろいろと教わった。

しかし、まだひとりで生活できる力はない。

そんな特技もコネもない十五歳の少女を雇おう、という心優しい人間はいないだろう。もちろん、嫁にもらおうという物好きも。

幸い、母は少々まとまったお金をヴィクトリアに遺してくれた。おかげで、すぐに借家から追い出されることはない。

とはいえ、どんなに切り詰めて生活したところで、無収入。

貯金はあつという間に消えてしまう。

店に残された生活魔導具の前に、ヴィクトリアは考えた。母の作ったこれらの品は、質がいいと町でも評判のものばかりだ。少し悩んだヴィクトリアだったが、在庫品で閉店セールをすることにした。

すると、「もう一度と手に入らない便利な魔導具」と噂になり、きれいさっぱり売り切れた。

……少々利益を上乘せしたものの、母の弔い費用に充てるということで許してもらいたい。

そうして当座の資金を増やしたヴィクトリアは、とりあえず職探しをはじめた。

生まれ育ったこの小さな町に、働き口は多くない。

農閑期に町のひとびとが皇都へ出稼ぎに行く話をよく聞いていたので、人口の多い都会に出ればどうにかなるだろうと考えた。

実に短絡的な思考である。

のんきなヴィクトリアは、町を出て、意気揚々と皇都に移り住むことにした。

けれど皇都へ入ろうとしたところで、門を守っていた衛兵に尋問された。

最初、自分のどこがあやしいのだ、とヴィクトリアはぶりぶり怒った。そんな彼女に、親切な衛兵はため息をつきながら理由を説明してくれる。いわく、皇都では銀髪はまずいのだとか。

ヴィクトリアの髪は一切クセのない、見事な銀髪だ。

早くに亡くなった父親譲りのこの髪が、母は何よりお気に入りだった。出会ったひとにも大抵褒めてもらえ、ヴィクトリアにとっても大切なものだ。

それに、いざというときには切って売ることができる。髪は腰まであり、どんなときも手入れを欠かしていない。

しかし衛兵によると、皇都では銀髪というのは歓迎されないらしい。それは、北の大国に住む者たちによく見られる色だからである。

ヴィクトリアはまったく知らなかったのだが、この国は二十年ほど前にその大国と戦争をしたのだそうだ。

今は条約を結んで不可侵の関係にあるものの、皇都では、北国の民に対する「なんかヤな感じ」という感情がいまだに根強く残っている。

よって、この国の皇族貴族に多い金髪は好印象だけれど、銀髪は——そういう扱いなのだとか。その話を聞いたとき、ヴィクトリアはお嬢さまのように口を覆って「がーん！」と口に出してしまった。ちよっぴり黒歴史である。

ともかく、故郷では高値がつくこと間違いなしと言われていた自慢の髪は、完全に貨幣価値ゼロになってしまった。

こんなことなら、皇都に出る前に売ってくればよかった。しかし、そう嘆いたところで後の祭りだ。

打ちひしがれるヴィクトリアを哀れに思ったのか、衛兵たちは彼女を詰所に通し、事情を尋ねてきた。

問われるままに、ヴィクトリアはこれこれこういうわけで、と皇都に出てきた経緯を説明する。聞き終わると、彼らは「く……っ」と目頭を押さえた。どうやら、揃って他人の不幸に同情しやすいタチらしい。

衛兵たちは口々に、「母親が魔導具を作る魔術師ならば、娘にも魔力があるかもしれない！」と言いだした。確かに、『魔力持ち』でなければ魔導具は作れない。

彼らは、詰所の奥から埃をかぶった魔力計測器を持ち出してきた。

後で聞いたのだが、魔力の有無は血筋によるところが大きいそうだ。魔術師になれるほどの魔力持ちは、平民にはそうそう生まれない。とはいえ、平民の母が魔力を持っていたように、例外がまったくないとはいえない。

魔力持ちの子どもは、幼い頃からその片鱗を見せるのだという。

たとえば、感情のまま無軌道に垂れ流された魔力によって、周囲のものが破壊されたりするのである。ヴィクトリアは今まで、そんな傍迷惑な現象を引き起こしたことがない。

そういった事実を知っていれば、計測器を出されたとき、自分には魔力がないと言い切ったかもしれない。しかし何も知らない彼女は、促されるまま計測器に手を当てた。結果、ヴィクトリアは魔力持ちだと判明した。

彼女の魔力は、皇都トップの魔術学校、『楽園』にぎりぎりもぐりこめるレベルだったのだ。魔術学校では、魔術式を組み立てて魔導石から魔導具を作り、扱う技術——魔術を学べる。そして、魔術を習得すれば、魔術師になれるのだという。

親切的な衛兵たちは、ほかにいづくか魔力持ちの子どもが学べる施設を教えてくださいました。だが、『楽園』ほど条件のいいところはなかった。

何しろ、魔力のレベルさえクリアすれば身分は不問、必要なのは健康な体だけ。おまけに全寮制で、学費食費そのほか経費は一切無料と来た。

『楽園』のシステムを知ったとき、ヴィクトリアは「四年間、三食宿代タダですかー!？」と歓喜した。そして生まれて初めて「神さま、ありがとう」と神に感謝した。

さっそく入学申請をするために、ヴィクトリアは国立魔導具研究開発局に突撃しようとして——親切的な衛兵たちに、ちよっと待て、と引き止められた。

国の中枢に行けば行くほど、銀髪に対するひとびとの忌避感は強くなるらしい。

幸い皇都では、ファッションとして髪を染めることが珍しくない。染髪の薬剤もいろいろと売られているそうだ。

めんどろごを回避するために、その銀の髪は目立たないようにした方がいい。彼らの言葉に納得したヴィクトリアは、まずは潔く、さっぱりと髪を切った。

せつかくここまで、きれいに伸ばしてきたのだ。いずれ皇都から出たときに、どこかで買い取ってもらおう。

そう思い、ヴィクトリアは紐でまとめて袋に詰めたそれを、大事に鞆の底にしまった。

そして短くなった髪を、皇都でもっともポピュラーな栗色に染めて、長めの前髪をざんばらに垂らした。

染められない眉やまつげは、これで隠せる。

最後に、分厚いレンズの眼鏡を装着したヴィクトリアは——どこからどう見ても「ちびでガリガリに痩せた少年」になった。

母が亡くなって以来、ちよつと無理しすぎて痩せてしまったのかもしれない。

胸にはそれなりに脂肪が残っている。しかし、厚手のシャツを着てしまえば、傍目にはわからないだろう。

鏡に映る自分のあまりに貧相な少年具合に、ヴィクトリアはお年頃の乙女として落ちこんだ。

そんな彼女を見て、衛兵のひとりがい出したように声を上げた。

「そういえば、『楽園』に入学するのは、ほとんど少年じゃなかったか？」

すると彼らは揃って、確かにそうだと言い出した。

彼らは魔力を持たない、ごく普通の一般市民のようで、魔力持ちの子どもたちが学ぶ学校について、さほど詳しい感じではなかった。

けれど、『楽園』がこの国で最高峰の魔術教育機関であることは、間違いないらしい。

どうせ学ぶなら、レベルが高い方がいい。

それに、他の学校に入るには、かなりの入学金が必要なのだという。

いずれにしろ、そんな金も仕事に就くスキルもないヴィクトリアに、選択の余地はない。

男だらけの学校に入れるだろうかと悩んだものの、ヴィクトリアは開き直すことにした。

幸い、この国では魔除けの意味をこめて男子に女性の名前をつけることがよくある。

今は一見少年だし、敢えて性別を明かす必要はない。入学条件に性別が関わらなければ、名前と外見で女だとばれることはないだろう。

女手ひとつで自分を育てるために働く母の背中を、ヴィクトリアはずっと見てきた。

男社会の中で女が生きる大変さは、よく知っている。それを思えば、少年として四年間勉強漬けの日々を送るくらい、どうということもない。

……若干、そんな寂しい青春を送る自分が可哀想な気はした。

けれど、天涯孤独の身には、上等だろう。

いつか魔術師になれたら、故郷に戻り、母と同じように小さな生活魔導具店を営みたい。

新たな人生の目標ができたヴィクトリアは、困ったなあと思ひねる衛兵たちを大丈夫だと笑っ

てなだめた。

その後、彼らに礼を言い、『楽園』の門を叩いたのだ。

幸い男子しか入学できないというのではなく、性別を問われることすらなかった。身体測定も健康診断もすんなり通り、拍子抜けするほど簡単に入学が認められた。

——そして、入学して一日で後悔した。

そこに集う生徒たちのほとんどが、貴族だったのである。そもそも魔力持ちは貴族に多いのだから、当然といえば当然だ。

ヴィクトリアと同じ平民の生徒も、皆無ではない。けれど、彼らはみんな貴族の後見を得ているようだ。『三食付きの全寮制。学費そのほかの経費が一切免除』という点に惹かれ、着の身着のまま入学した考えなしは、彼女のほかにほひとりもないなさそうだった。

そんな彼らになかなかなじめず、ヴィクトリアは入学してから、自分を叱る寮長以外の生徒とはまともに言葉を交わしていない。

入学時に『楽園』の魔力計測器で調べた魔力量により配属されたクラスは、最下級クラス。その中でも、身分をもとにしたヒエラルキーはきっちり存在していた。

貴族の後見を受けていないヴィクトリアは、当然ながら一番下——クラスの一員として認めるのも嘆かわしい、という扱いだ。

それでも、ヴィクトリアがどうか学生生活を送れているのは、ひとえに母のおかげである。

母は幼い頃から、魔導具に関する知識を、ことあるごとに授けてくれた。今のところ『楽園』で

教わった知識は、すべて母に聞いたことがあるものだった。ちなみに、ヴィクトリアはずっと母の魔導具から、魔力や組みこまれた術式を読み取ることができていたのだが、それらを読めるのは魔力持ちの人間だけなのだという。その事実を『楽園』に入ってから初めて知ったヴィクトリアは、術式は読めて当たり前だと思いついていた自分が、ちよっぴり恥ずかしくなった。

そういうわけで、実技はともかく、座学に関しては常に満点近い点数を取っているヴィクトリアは、かろうじて教室に存在することを許されている。

上級クラスの生徒たちからは「魔力の低い、頭でっかち」とばかにされているようだが、実害はないのかまわらない。表だってヴィクトリアをいじめれば、かえって彼らのプライドが傷つくのだから。

ヴィクトリアは、暇さえあれば自室でせつせと勉強に励んだ。すべては、平穩無事な学園生活のためである。

四年の在学期間で、どの程度の知識を学ぶのかはわからない。けれど、母のおかげで得たアドバンテージは、すぐになくなってしまっただろう。周囲に追いつかれて席次が落ちたら、一体どんな恐ろしい目に遭うことやら——想像するだけで冷や汗がにじんでくる。

もちろん、余計な問題を起こさぬよう、本人なりに必死の努力をしている。起床するための爆音目覚まし時計も、そのひとつだ。

なのにどうして、これほど寝起きが悪いのか。そんなの、自分の方が知りたいくらいだ。

しょんぼりと肩を落とすヴィクトリアの頭上で、黒髪の寮長がため息をつく。彼は入学時に測定した魔力量がトップ。さらに入学して以来、実技でも座学でもトップの成績を修めているらしい。

将来この国の中枢を担うことが決まっている、スーパーエリートのお坊ちゃんだ。その上、時折聞こえてくる噂によると、かなり身分の高い貴族の家の出なのだから。

見た目、身分、実技に加え、学力も魔力保有量もトップクラス。

そんなふざけたイキモノが存在するとは、世の中は実に不公平だなあ、とヴィクトリアは彼を見つらびしみじみ思う。

世の不公平を体現する寮長リージェスは、毎度おなじみのトイレ掃除をヴィクトリアに命じた。そろそろ「トイレ掃除」というあだ名がつけられてしまいたいそうだ。

ヴィクトリアはどんよりしながら、整列する生徒たちの最後尾に並ぶ。そして、朝礼が終わるのをぼーっと待った。

リージェスが『楽園』に入学したのは、十四歳だったらしい。『楽園』には十四歳から入学が可能で、二十歳を越えてからでも入学はできる。そのためリージェスは、最上級生となった今でも、生徒たちの最年長ではない。

ヴィクトリアの同級生も、十四歳から二十一歳までと幅広い。

リージェスの若さで、『楽園』の多種多様な生徒を束ねるのは、大変なことだろう。

とはいえ、『楽園』で上下関係の基盤となっているのは、あくまでも身分。年齢はさほど意味を

持たないのかもしれない。

そして非常に残念なことに、名目上の入学資格は「男女問わず」なのだが、ここ十年、女子は入学していないのだという。

実質、男子校で、そもそも女子寮がないようだ。

過去の女子生徒に少し興味を持って、ヴィクトリアは図書館で記録を調べてみた。

十一年前に在学していた女子生徒は、貴族の中でも武門で名高い家のお嬢さまだった。跡継ぎの男子がいなかったことから、『楽園』に入学したらしい。彼女は特例措置で自宅から毎日通学していたという。

もし自分が女の格好のままだったら、入学を拒否されていたかもしれない。——やはり、男で通した方がよさそうだ。

そう思ったヴィクトリアは、ますます自室に引きこもるようになった。幸いにも、寮はすべて個室。

万が一、生徒が寝ぼけたりけんかをしたりして魔力を暴走させても、被害を最小限にするためだ。基本がお貴族さま仕様なので、シャワールームも完備されている。

実にありがたい。

おまけにこの『楽園』では、テストの成績優秀者にはご褒美が出る。

成績に応じて、かなりのお金が支給されるのだ。貴族のお坊ちゃん方にとっては、おこづかい程度の感覚なのだろうか。

とはいえ、将来に備えて少しでも店の開店資金を貯めておきたいヴィクトリアには、勉強に励む大きな理由のひとつとなった。

そういった諸々の事情が積み重なり、彼女は完全なる引きこもり少年と化している。それはさておき、今は遅刻についてである。これほど回数を重ねれば、トイレ掃除も上達する。ヴィクトリアは、そろそろエキスパートになりつつあった。もはや、『菜園』内の清掃業者に就職できそうな熟達ぶりだ。

実際、掃除用具を借りる際に彼らにさり気なく尋ねてみたところ、満更でもない答えが返ってきた。

もし卒業前に女だとなれば放校されたら、働かせてもらえないか聞いてみよう。

我ながら、前向きなんだか後ろ向きなんだかわからないことを考えていたら、朝礼が終わった。ヴィクトリアは、自室に戻るべく歩き出した。

しかし、建物に入ろうとしたところで、不意ながら聞き慣れてしまったリージェスの声に呼び止められた。

「——ヴィクトリア・コーザ」

「ひゃいっ」

反射的に、背中を壁に貼りつける勢いで後ずさった。

しがない平民にとつて、リージェスは完全なる雲の上のひとである。一部学生の間では、もはや崇拜の対象となっていると聞く。

彼とは、迂闊にお近づきになりたくない。

そう思つて日々自分の寝汚さと勝負しては、しょっちゅう敗北しているヴィクトリアだ。

もしリージェスの崇拜者に「彼に近づこうとする不屈者」判定されてしまった場合、恐らくヴィクトリアに明日はない。

なんとしても、彼とは関わりたくないのである。

雲の上で生きるひとびとは、雲の上の世界で仲良しこよしをしていなければならない。

こちらら、きらきらしい世界とは無縁の、最下層で生きているのだ。

生きる世界の隔たりを飛び越えられては、かろうじて保っている平穩無事な学生生活が崩壊しかねない。

ヴィクトリアは恐怖にふるふる震えた。こっち来るなオーラを全開にしつつ、どうにか口を開く。

「な……何か、ご用で、しょうか……?」

こんな風にひとに拒絶されたことなど、今までないのだろう。

お坊ちゃまは微妙に顔を引きつらせている。

そして眼鏡の奥の目が、すうっと細められた。怖すぎる。

おびえるヴィクトリアに、リージェスはゆっくりと低く告げた。

「——今日の放課後、オレの部屋に來い」

「え、いやです」

反射的に答えてから、ヴィクトリアは思ったことをそのまま口に出す自分の脳を、きゅつとシメたくなった。

一層冷ややかになったリージェスの視線と、周囲の空気が痛すぎる。

上級生の要請を即答で拒絶するなんて、少々礼儀知らずだったかもしれない。

けれど、いきなりそんなことを言われても、困るのだ。こちらの事情をまるで斟酌しないのは、いずれひとの上に立つ人間としてはいかなものかと思う。

ヴィクトリアはだらだらと冷や汗を垂らしながら、内心で懸命に自分を正当化した。

その間も、寮長さまが立ち去る気配はまるでない。

仕方なく、ヴィクトリアはぼそぼそと自己弁護をはじめた。

「あの……です、ね。わたしは、勉強がしたくてこの『楽園』に入学したんです」
嘘である。

三食宿付に惹かれて入学しました。そう正直に言うのは、さすがにちよつぴり恥ずかしかったのだ。

しかし今は、きちんと勉強して将来小さな生活魔導具店を開業したいと思っている。だからまったくの嘘ではない。ヴィクトリアは自分に言い訳しつつ、先を続けた。

授業中に指名されて教師の問いに答える以外、ほとんど話さない日々だ。

こうして長い文章を話すのは久しぶりなせいか、どうにも話しくい。

「なので、寮長さまのように、周囲のみなさまから大変人気のある方とは、極力お近づきになりた

くないのです。

身のほど知らずな振る舞いをした平民は、いつ、どんな理由をつけて追い出されるかわかりかねます。どういった理由で、わたしをお招きくださるのかは存じません。けれども、これからもつつがなく勉強を続けるために、ご遠慮申し上げたい次第です」

できるだけ、切々と訴えてみる。お坊ちゃまは、迂闊に平民に近づいてはいけないのだ。

すると、なぜかリージェスは頭痛でもこらえるように眉間を押さえた。

「……なるほど」

少して彼がつぶやいた言葉を聞き、ヴィクトリアはとつても嬉しくなった。

彼がこちらの主張を受け入れてくれたのなら、今後こういった恐ろしいことは起こらないだろう。

保身第一。

臭いものにふた——と言つては、さすがにリージェスに対して失礼かもしれない。けれど、気分

はまさにそんな感じなのである。

「はい。それでは、失礼いたしました——」

「待て。誰が行つていいと言つた」

藍色の瞳にじろりとらみつけられて、ヴィクトリアはその場でびよつと跳び上がった。

蛇ににらまれたカエルとは、もしかしたら跳ねるものなのかもしれない。

錯乱しかけたヴィクトリアに、リージェスは苦々しげに眉を寄せた。

「わかつているのか？ おまえ、なんの後見もなかったら、卒業したところでもくなく職に就けない

だろう」

ヴィクトリアは、きよとんと目を丸くした。

「いえ？ わたしは『楽園』を卒業したら、故郷に戻って小さな生活魔導具店を営むつもりです。なので、就職先の心配はしておりません」

この卒業生たちのほとんどは、皇都で職を得ている。それは知っていたものの、ヴィクトリアはこんな家賃が高い土地で店を構えるほどの大志を抱いていない。

まずは、自分が食べていけるだけの稼ぎを得ることが大事。そして、いつか付き合いのできた業者あたりに縁を頼んで、旦那さまをゲットできればいい。

ヴィクトリアのささやかな未来図を聞いたリージェスは、わずかに目を見開いた。そしてふたたび、眉間を押さえる。

「……コーザ」

「は、はい？」

まるで地の底から響くような、おどろおどろしく低い声で呼ばれた。

ヴィクトリアは、また跳び上がりそうになるのを、どうにかこらえる。

リージェスの目は、完全に据わっていた。

「おまえの故郷が、どこかは知らん。だが、『楽園』で座学とはいえ首席を誇る人材が、ちつぽけな生活魔導具店を営んで暮らすなど、許されると思うのか？」

彼の問いに、ヴィクトリアは少し考えてから口を開く。

「すみません。何が許されないのか、わかりません」

正直に答えると、リージェスの口元がひくりと引きつった。

「……この『楽園』はな、国民の血税で運営されているんだ。つまり、オレたちはここで学んだことを、卒業後には国民のために生かす義務があるんだよ」

低く言い聞かせるように告げられた言葉に、ヴィクトリアは首をかじげた。

「ええと……それでしたら、何も問題がないと思うのですが。ここで学んだ知識で便利な生活魔導具を作製し、格安価格で提供できる店を営んで国民の生活に貢献します」

ヴィクトリアがそう言うと、リージェスはぐつときつく拳を握りしめた。

「おまえは……一体、どんな魔導具を作るつもりなんだ？」

「まだ試行錯誤中です。いずれは、母が作っていた魔導具を再現できたらいいなと考えております」

母の作る生活魔導具は、主婦のかゆいところに手が届くものばかりで、近所の奥さま方に、とても重宝されていたのだ。

中でも最大のヒット商品は、水道の蛇口に取りつけて水をほどよい温水にするものである。冬場でも食器洗いがつらくなかった、と大層喜ばれていた。

そんなことを思い出してしんみりしていたヴィクトリアは、リージェスが戸惑った顔をしたことには気づかなかった。

「おまえの母親も、魔術師なのか？」

「あ、はい」

それがどうしたのだろう。

彼を見上げると、リージェスは訝しげに眉を寄せる。

「なぜ、母親の名を出さない？ 商品になるレベルの魔導具を作製できる魔術師なら、それなりの階位にあるはずだろう」

ヴィクトリアは目を丸くした。

「そうなんですか？」

「は？」

いえその、とヴィクトリアは困って眉を下げる。

「母が亡くなるまで、わたしは自分が魔力持ちだと知らなかったのです。そういう話を聞く機会はまったくありませんでした」

「……亡くなった？」

「はい。『楽園』を卒業したら、母のような立派な魔導具を作る魔術師になりたいと思っているのですが——何か、いけないことがあるのでしょうか」

なんだかよくわからないが、もし何かしらの規制があるなら大変だ。

それこそ、『楽園』ですつとトップの成績を取るリージェスである。魔導具屋の経営にも詳しいのかもしれない。

問題があれば早めに教えてもらいたいなと思っていると、リージェスが聞いてきた。

「おまえの、父親は？」

「わたしが幼い頃に、亡くなりました」

そうか、とつぶやいたリージェスの声からは覇気が消えている。

「……いや。すまない。余計なことを言った」

ヴィクトリアは仰け反った。

否、仰け反りかけて後頭部を壁に打ちつけた。とても痛い。

（お……お坊ちやまが、謝った!? 気色悪っ!）

ヴィクトリアにとつて、『楽園』の生徒たちは常にふんぞり返り、自分を見下すものなのである。そのお坊ちやまのトップに君臨するリージェスだ。

彼がヒエラルキーの最下層に位置するヴィクトリアに謝罪するなど、想定を通り越してとてもなく気色が悪い。

打ちつけた頭の痛みも忘れ、ヴィクトリアは青ざめて震える。

それに気づいたのか、リージェスは彼女に手を伸ばしてきた。

「どうした？ 体調でも——」

限界である。

（お仲間連中の崇拜対象なお坊ちやまが、迂闊に平民に近づいてくんじゃねーっ！ ……つて、ココロの中で言っただけだからおがああああああっ!!）

お坊ちやまに謝罪された気色悪さと、生存本能の発する危険信号が限界値を突破した。

その結果、ヴィクトリアの足は本人が意識する前に全力でダッシュしていた。

……自室にたどりついて我に返り、ヴィクトリアはようやく自分のしでかした無礼極まりない行為に気がついた。

一層青ざめたのだが、後悔先に立たず。

——人間は、ときに己の衝動を制御しきれない瞬間に遭遇するものなのである。

第二章 ラング家のひとびと

一週間のトイレ掃除をきっちりクリアした日。

ヴィクトリアは、久しぶりに放課後の外出許可を得て、街へ出た。

(ふふふ……今のところは、寮長さまに接近したくない一心で、どうにか朝の試練をクリアしている。えらいわたし、がんばれわたし。けれど人間というのは、どんなに緊張していようといずれ慣れてしまうものなのよ。悲しいことに)

決して長くない今までの人生の中で得た、数少ない真実である。

その教訓を生かすため、新しい目覚まし時計を購入するのが街へ来た目的だ。

さすがは皇都。この街には、時計の専門店が軒を連ねる通りがある。

ヴィクトリアが足を踏み入れることができなほど、高級な時計を扱っている店が多いものの、庶民向けにお手頃価格の品を揃えている店もきちんとある。

選択肢の多さは豊かさの象徴かもしれない、なんて感心しつつ、今までに何度か訪れた店のショーウィンドウを眺める。

「大音量」とキャッチコピーがついているものであれば、多少お高くても購入したい。

しかし、規格外の大音量目覚ましはあまり人気がないようだ。

いくつものショーウィンドウをのぞいてみるが、どこにも置いていなかった。最後の店の前で、今日は収穫なしかとうなだれていたとき、ぼんと肩を叩かれた。ヴィクトリアが驚いて振り返ると、ぼんやりと見覚えのある背の高い青年が立っている。制服ではないため判然としなが、顔を見たことがあるのだから、彼は『楽園』の生徒なのだろう。

ヴィクトリアは、慌ててショーウィンドウの前から離れた。

「お、お邪魔して申し訳ありません！」

そのままダッシュで逃げようとして——ぐっと青年に腕を掴まれる。

「い……っ」

「わ、悪い！」

ちようど腕を捻る形になったというのもあるが、そもそも相手の力が強すぎた。

ずきずきと痛む関節に涙目になると、青年が焦った様子で腰を屈めた。

「大丈夫か？ つつーか、おまえ細すぎだろう。ちゃんとメシ、食ってんのか？」

……貴族のお坊ちやまにしては、随分言葉遣いが粗雑である。

ひよっとして、貴族の後見を受けている平民なのだろうか。

そう思いながら見てみると、彼は華やかな金茶色の髪に明るいスカイブルーの瞳という、なんとも煌びやかな容貌をしていた。おまけにその派手な色彩にまったく恥じないレベルで、顔立ちも甘く整っている。

魔力持ちの人間は、その保有量が大きいほど容姿も美しくなる傾向がある。

さらに、粗雑な言葉遣いにもかかわらず、彼の物腰からはなんとなく育ちのよさを感じられた。

「うわ、鶏ガラみてえな腕だな」

無神経だ。

やはり、やんちゃぶりたいお年頃の、貴族のお坊ちやまなのかもしれない。

「食事は、きちんといただいています。失礼します」

なににせよ、『楽園』の生徒たちとは、あまり関わり合いになりたくないものである。

そそくさとその場を離れようとしたヴィクトリアに、青年は苛立ったような声を上げた。

「だから、ちよつと待て！ なんつで、そんなすぐ逃げようとしやがんだ！」

「怖いからです」

簡潔に答えたヴィクトリアに、青年が目を丸くする。

「『楽園』の方々は、怖いんです。——わたしは、怖いのは嫌いです」

だから、関わらないでください。

そう言外に告げたつもりだったのだが、青年は一瞬の沈黙の後、がっしとヴィクトリアの頭を鷲掴みにした。

痛くはなかったが、びっくりした。

青年が、深々とため息をつく。

「——三年のシャノン・ラングだ。別に取って食わねえから、そうびくびくすんな」

「はあ……」

ヴィクトリアは、間の抜けた声をこぼした。

この青年のご両親は名付けるとき、よもや息子がこんな派手派手しくも男らしい容貌に育つとは予想していなかったのだろう。わかつていれば、さすがにシャノンなどという可愛らしい女性名をつけまい。

シャノンはヴィクトリアから手を離すと、少し困ったような顔であたりを見回した。

「まあ……立ち話もなんだ。なんかおごつてやるから、ついてこい」

やっぱり、彼は貴族のお坊ちやまなのだろう。命令口調が実に板についている。

とはいえ、おごつていただけるのであれば、ヴィクトリアに断る理由はない。

これが『楽園』の食堂なら、断固としてお断り申し上げる。しかし、ほかの生徒たちのいない街中だったら大丈夫だ。

歩いてみると、背の高いシャノンとヴィクトリアでは歩幅があからさまに違う。

彼の後をついていくために小走りになってしまったけれど、それに気づいた彼は途中で歩調をゆるめてくれた。

「……おまえ、いくつだ？」

歩きながら、シャノンはヴィクトリアに問いかける。

「十五です」

答えると、シャノンはちらりと横目にヴィクトリアを見下ろした。

「それにしちゃあ、ちっこいな」

「はあ……」

確定。

この無神経さは、貴族のお坊ちやまに違いない。

ヴィクトリアはお年頃の少年ではないから、無駄にでかい上級生にちっこいと言われてもなんとも思わない。

けれど、男の子であれば、今のは少なからず苛つくだろう。

彼はもしかして、余計な一言で不必要な敵を作るタイプかもしれない。

『楽園』に戻ったら、極力近づかないようにしよう。

そんなことを考えつつ連れていかれたのは、多くのひとびとでにぎわう小洒落た喫茶店だった。

故郷の素朴な焼き菓子が大好物なヴィクトリアだが、皇都の洗練されたお菓子にもまた別の魅力を感じる。

「なんでも好きなものを頼んでいい」というシャノンの言葉に、ヴィクトリアの脳内で歓喜の鐘が鳴り響く。

ちよっぴり悩んで、季節のフルーツをふんだんに使ったタルトを注文した。おいしいスイーツは、問答無用でヴィクトリアを幸せにしてくれる。

ブラスクコーヒーだけを注文したシャノンは、もしやこの幸せを享受できない人種なのだろうか。気の毒なことだ。

あーうまうま、と甘い幸福感に浸る。

そこで、じつとこちらを見つめるシャノンの視線に気づき、ヴィクトリアは軽く首をかしげた。「何か？」

「いや。つくづく小動物みてえなヤツだな、と」
自分が小動物なら、シャノンは獅子だ。

そう言おうかと思っただけで、あまりにベタな褒め言葉のような気がしたので、やめておく。この猫科の肉食獣っぽい外見をした青年が自分に害をなさない相手だと、なんとなくわかってきた。

断じて、タルトひとつで餌付けされたわけではない。ただの勘だが、ヴィクトリアの勘は結構当たる。

ヴィクトリアがタルトの最後のひと切れを口に放りこんだところで、シャノンはおもむろに口を開いた。

「……オレは、リージェスとは腐れ縁つてヤツでな。ガキの頃から、あのカタブツとよくツルんでたんだが」

「そうなのですか」

ヴィクトリアは感心した。あのクール系イケメンの寮長さまと、この派手系イケメンのシャノンが並べば、さぞかし女性たちの目の保養になるだろう。

怖いのでお近づきにはなりたくないが、一度、遠目から見てみたいものである。

そんな妄想に思いを馳せていたヴィクトリアを、シャノンはじつとりとした目で見つめた。

「先週、余計なことを言っておまえに逃げられてから、あいつが鬱陶しくて仕方がねえ」

「……はい？」

ヴィクトリアがきよとんとすると、だからな、とシャノンは声を低くする。

「あいつはあいつなりに、一年の中で完全に孤立してる首席のガキを気にかけてたんだよ。……オレの言うこっちゃんええんだろがな。おまえが望むんだったら、あいつの家で後見する段取りまでつけてたんだぞ」

ヴィクトリアは目を丸くした。

「それで——あの『オレの部屋に來い』だったんですか？」

「多分な。なのに逃げられて、口には出さないが、どんより落ちこんでやる」

「はあ……お氣遣いありがとうございます。……と言うべきところなのかもしれないけど、なんだかめんどくさい方ですねえ」

コーヒーカップに口をつけていたシャノンが、ごふつと奇妙な音を立てた。

ひとしきり、げほごほとむせた後、手の甲で口元を押さえてヴィクトリアを見る。

「め、めんどくさい？」

めんどくさいというより、厄介という方が正しいだろうか。

でも厄介ごとはやっぱりめんどくさいだよねと思いつながら、ヴィクトリアは小首をかしげた。

「いや、だって。貴族のお坊ちゃんにあんなえらそうに言われたら、普通平民はビビります。あな

方にはおわかりにならないかもしれませんがね、本当に怖いんですよ。正直あの後、『楽園』を辞めようかと思いましたから」

幸い、あれから周囲が敵意を向けてくることはなかった。だからこうしていまだに『楽園』の生徒でいられる。それでも、出て行く覚悟だけはしておくべきだろう。

学校の図書館で得られる知識はかなり惜しいが、自分の身を危険にさらしてまで手に入れたものではない。

ヴィクトリアはすでに魔導具作製の基礎がまとめられた一年の教科書を読破している。その知識で、単純なつくりのものならば、もう魔導具を作製できるのだ。

今故郷に帰って、母の名を知っているひとつと向けに商売をはじめれば、きつと食うには困らな

いだろう。

そう言うと、なぜかシャノンが嘩然とした。

「どうかしましたか？」

「どうか……って、ちよつと待て？ おまえ、もう魔導具を作製できるってか？」

シャノンに聞かれ、ヴィクトリアはうなずいた。

「あまり複雑な機構のものは無理ですが。教科書に、魔導石への術式の組みこみ方が書いてありましたし」

シャノンはしばし、眉間に手を当てた。

その後、首に巻いていたチョーカーをはずし、ヴィクトリアの前に置く。

ずっと彼が身につけていたからだろう。そのトップにあしらわれているダークグリーンの貴石は、かなり純度の高い魔力を孕んで輝いている。

魔力持ちの人間が石を持っていて、石が魔力を吸収して魔導石になるのだ。

「——なんでもいい。これを使って、魔導具を作ってみろ」

「え、いいんですか？」

ヴィクトリアは今までもきれいな石を拾って持ち歩き、それに少し魔力が貯まったところであるいろと試していた。しかし、こんな立派な魔導石を素体にするのは初めてだ。

さすがは貴族のお坊ちゃま。気前がいいなあと感動しつつ手に取ると、本当にきらきらと美しく輝いている。

ヴィクトリアは、幼い頃から母の工房で輝く魔導石に囲まれてきた。

それでも、こんなにきれいなものは数えるほどしか見たことがない。

(ま、母さんの形見が一番キレイだけだねー)

工房に残されていた生活魔導具は、すべて売ってしまった。

けれど、母の化粧台の引き出しに丁寧にしまわれていた装飾品は、形見として今も大切に持っている。それらは魔導具化された魔導石が使われていたが、店で売っていたような生活魔導具ではなく、どう値段をつけていいものかわからなかったからだ。

貴族のお坊ちゃまの持ち物であれば、あ、あ、あ、遊び心のあるものにしてもいいかもしれない。

楽しくなってきたヴィクトリアは、母の形見の魔導具に付与されていた術式を少しアレンジして

使ってみることにした。

幸い、この魔導石にこめられている魔力はシャノンのものである。

作製する前に魔力の波長を解析して魔導石に登録すれば、使用者限定術式も同時に組みこめる。生活魔導具職人を目指す身には憂鬱ゆううつなだけなのだが、『楽園』の必須授業じゅぎょうには戦闘実技というものがあつた。ヴィクトリアは当然の如く、実技に関しては最下位を独占している。

戦闘実技は、体術、魔導剣術、遠距離攻撃系魔導具術に科目が分かれていて、魔力保有量の少ない最下級クラスの生徒は、体術以外は免除される。それが、救いといえれば救いである。

ともかく、これだけ純度の高い魔導石を作れるシャノンだ。戦闘実技も得意に違いない。

「ええと……。ラングさまは、戦闘実技では何がお得意ですか？」

ヴィクトリアが聞くと、シャノンは魔導剣術と答えた。思わず、ぐふつと笑いそうになる。

（ふつふふふ……よいではないかよいではないか。わたしは形見の中でも、母さんが作ったときらきらの魔導剣が大好きです！）

母の形見として持っているものは、生活道具のような便利機能も攻撃機能もついていない、装飾過多な飾り物ばかり。

使用者限定術式がかかっているので、ヴィクトリアにはそれらを起動することはできない。だが、術式から起動後の外観はイメージできる。その外観設定や基礎性能に『楽園』で学んだ実用的な術式を付加すれば、シャノンが実技で活用できるものになるだろう。

すっかりテンションが上がったヴィクトリアは、すつと呼吸を整えると魔導石を手のひらに載せた。

そのとき、シャノンがはめている、家紋らしきマークが刻まれた指輪が目に入る。きれいだなあと思いつつ、ヴィクトリアは魔導石を意識を集中させた。そこにこめられた魔力を解析し精製、組み上げた術式を付与——

「——できました。どうぞ」

魔導具化したチョーカーをシャノンの前に置く。すると、なぜか彼の顔から表情が消えていた。もしや、満足していただけない出来なのだろうか。不安になっていると、彼は妙にゆっくりとそれに手を伸ばす。

「……長剣タイプの魔導剣。所有者はオレ限定か」

「はい。すでにお持ちかとは思いますが、予備のひとつとしてお使いいただければと。デザインは母の形見の魔導剣を参考にしています」

なるほど、とシャノンはうなずき——ふふふふ、と不気味な笑いをこぼした。

ヴィクトリアはどん引きした。

「……ヴィクトリア・コーザ」

「は、はい？」

物理的にも椅子の背もたれぎりぎりまで体を引いていたヴィクトリアを、シャノンのスカイプルーの瞳が見据える。

「おまえの母親は、生活魔導具を作つて生計を立てる魔術師だった——そうだな？ その形見の魔

導剣も母親が作ったものなのか？」

「……はい。それが何か……？」

彼の低く感情を抑えた声が、ゆっくりと問う。

「母親の名は？」

「ロッテイ、ですが。ロッテイ・コーザ」

ロッテイね、とシャノンが口の中でその名を転がした。

「ロッテイ——シャールロットの、愛称だな」

はい？ と首をかしげたヴィクトリアに、シャノンは言った。

「オレの知る限り、ロッテイという名の女性魔術師は、今までこの国にはいない。そもそも、女性が戦術に関わる魔術を学ぶことは、ほとんどないんだ。極一部の例外を除いてな」

「はあ。ということは、母はモグリ魔術師だったのでしょうか」

それは、もしかしたらまずいことなのだろうか。ちよつと不安になっていると、妙に脱力した顔のシャノンがため息をついた。

少し考えこむようなそぶりを見せた後、彼は改めて口を開く。

「……魔術師ではないが、シャールロットという名の魔術に長けた十七歳の女性がいた。彼女は二十年前に、北のセレスティアとの戦乱の中で消息不明になっている」

「え？」

「シャールロット・ローズ・ラナ・ギネヴィア皇女殿下。——ここギネヴィア皇国皇帝、ベルナー・

デュバル・ロス・ギネヴィア陛下の姉君にして、希代の魔女。自らセレスティアとの戦いに身を投じ、戦死したとされている方だ」

どうやら真面目に言っているらしいシャノンを見て、ヴィクトリアは思った。

このひと、頭大丈夫だろうか——と。

いくら相手が正気を疑うようなことを言い出したとしても、対応には注意が必要だ。特に、それが貴族のお坊ちゃんであった場合、思ったままを口にしてはいけない。

その教訓をつい先日得たばかりであったことに、ヴィクトリアはひそかに感謝した。

リージェスの場合、彼のお誘いをうっかり素でお断りしてしまっただけだ。

けれど、今かろうじて呑みこんだのは、「アナタ、頭大丈夫デスカー？」という失礼極まりない言葉である。

もしつるつと吐き出してしまえば、自分が作ったばかりの魔導具で切捨御免にされてしまうかもしれない。

なんと恐ろしい。

ヴィクトリアはとりあえず、へらつと笑ってみることにした。

「あの……ですね？ ラングさま。わたしの故郷は南の最果てにあるグラントという田舎町です。北の隣国と戦争していたことさえ語られない、ド田舎です」

そんなところで、皇帝陛下の姉君が生活魔導具店など営んでいたわけがないだろう。笑い話で流そうとしたのに、シャノンは変わらず真顔のままだ。

「おまえの母親の髪は、何色だった？ シャーロット殿下は金髪だ」

「母も金髪ですけど……別に珍しくないでしょう。大体、シャーロット殿下は戦死されたのではないのですか？」

「正確には、戦闘中に行方不明となった。ご遺体はいまだに見つかっていない」

偶然の一致に、シャノンはいしつこくこだわる。

ヴィクトリアはわずかに頭痛を覚えた。

「……ラングさま。わたしが言うこつちやないかもしれません。でも、貴族のお坊ちやまが迂闊にそんなことを口にいいていいんですか？ こんなばかな話、下手すりゃ皇帝陛下への不敬に当たりますよ？」

シャノンが言葉に詰まる。

どうやら、頭が完全におかしくなってしまったわけではないな、とほっとする。

「そりゃあ、わたしは母の仕事を覚えていて、魔導具作製に関しては実践的な知識を少し持っています。けど、わたしの魔力保有量は、最下級クラスにかるうじて引つかかる程度のものでしかありません。この国最高の魔力保有量を誇る皇帝陛下ご一族の血を引いているなら、いくらなんでもありえないのではないでしょうか？」

そうやってさくさくと現実を並べてみせると、シャノンの瞳にも少しずつ揺らぎが見えてきた。

いっそのこと、自分の髪がこの皇都で——そして恐らく皇帝一族の間で、忌み嫌われている銀髪なのだと明かしてやろうか。

一瞬そう思ったけれど、今後の平穏な学生生活のためにやめておくことにする。

それにしても一体全体、なぜこんなばかなこじつけ話を思いついてしまったものやら。あきれ半分でシャノンを眺めていると、彼の指がぐつとチョーカーを握りしめた。

「二十年前——オレの祖父は、シャーロット殿下を護衛する騎士のひとりだった」

低く抑えた声にこめられた思いに、息を呑む。

「祖父は今でも、殿下のご無事を信じている。どんな絶望的な状況の中でも、必ず奇跡を起こしてくださる方だったと。その殿下が、自分より先に亡くなるわけがないと」

年寄りの昔話で片付けるには、少々重すぎる話だ。

シャノンが強い瞳でこちらを見た。

「——いいか。おまえの術式を構築する速さも正確さも、はつきり言って『楽園』の教官たちよりも遙かに上だ。いくら魔力保有量が少なくても、そんな天性のセンスの持ち主がそうそう転がっているたまるか」

彼はまったくあきらめるつもりはないらしい。

(何このひと、めんどくさい)

先日のリージェスといい、貴族のお坊ちやまはみんなめんどくさいイキモノなのだろうか。

ヴィクトリアは、思わず半目になった。両手を拳にしてぐりぐりとこめかみを押し、口を開く。

「えーと……ラングさま？ 百万歩譲って、わたしの母がシャーロット殿下だったとしましょう。

ですけど、母はすでに亡くなっています。それを証明することは、もはや不可能です。あなたは一

体、何をなさりたいのですか？ まさか、こんな鶏ガラのような貧相な子どもを、ちよつとばかり魔導具作製に長けているからといって、シャーロット殿下の忘れ形見としておじいさまの前に連れていきたいわけではないでしょう？」

うむ、とシャノンはずなずいた。

目を覚ましてくれたかと、ヴィクトリアはほつとしたのだが――

「もつとちゃんとメシを食え。オレはじーさんから、シャーロット殿下がどんな方だったのか、詳しく話を聞いてくる」

「ほんつとにひとの話を聞かない方ですね！」

思わず声を荒らげてしまう。ここまで来ると、あきれを通り越してちよつと感心する。

シャノンはちつと舌打ちした。お坊ちゃまのくせに、行儀が悪い。

ヴィクトリアは顔をしかめる。

(ふーんだ。やな感じー)

「――とりあえず、魔導具を作製できるようになるのは、最低でも『楽園』で二年までの課程を履修し終えてからだっていう常識くらい覚えておけ。オレの同期でも、まだ四苦八苦しるヤツがいる。入学から半年足らずのおまえがホイホイやってみせたら、反感を買うかもしれないねえ。座学で首席ってだけでも充分すぎるくらい目立ってたんだ。めんどろごとがいやなら、あんまり派手な真似はするなよ」

「は……はい！ ご忠告ありがとうございます！」

(なんていいひとなんだ、ラングさまー！)

ヴィクトリアは、一瞬で手のひらを返した。

そんな彼女に、シャノンはふと何かを思い出したらしい。

「そーいやおまえ、さつき時計店を見ていたのはあれか？ 目覚まし時計を買いにきてたのか、遅刻常習犯」

からかうように言われ、シャノンへの好感度がふたたび下がった。

「……はい。でも、すでに持っているものよりいいものが見当たらなかったのです。残念に思っていたところでした」

こちらら、好きで遅刻しているわけではないのだ。

むつつりとしていると、シャノンがあきれ返った顔をする。

「おまえ……魔導剣を作るレベルのスキルがあるんだったら、目覚まし時計くらい自分で調整したらどうなんだよ？」

「あつ」

盲点だった。

『楽園』に入学して以来、怒濤の如く知識を詰めこんできた。

加えて母の実践的な技術を覚えていても、それらをどう活用したらいいのか、いまだまったくわからないヴィクトリアだった。

己の応用力の低さに愕然としつつも、そう簡単にいかない事情もある。

ヴィクトリアは、ぼりぼりと頬を搔いた。

「そう言われれば、その通りなのですが……。わたしの魔力保有量では、なかなか魔導石を作るとはできませんし」

魔力保有量の多い人間なら、身につけているだけで簡単に普通の石を魔導石化できる。しかし、魔力保有量の少ない人間が石に魔力を吸わせるには、時間がかかるのだ。

魔力を吸いやすい貴石なら、普通の石より短時間で純度の高い魔導石にすることができるだろうが、ヴィクトリアが貴石を入手するのは難しい。貴石はとても高価で、シャノンのように金に困らない、極一部の貴族のお坊ちやまでないと手が届かない代物なのだ。

だから単純に言えば、魔力保有量の多い人間は、魔力保有量の少ない者より、質のいい魔導石をたくさん持てる。生活魔導具の素体となる小さなものとはいえ、母は商売に困らない程度に魔導石を量産できていた。

きっと、それなりの魔力があったのだろう。うらやましい。

シャノンはなるほど、とうなずいた。

「これが宝の持ち腐れというやつか」

「身もふたもないことをおっしゃいますねえ」

自分も相当だが、シャノンの口の残念具合もかなりのものだ。

せつかくこれだけのイケメンなのに、齒に衣着せぬことばかりつる言っているのは、女性にモテないのでは。そう思ったものの――

（――うん。『ただしイケメンに限る』スキルと、オカネモチな貴族のお坊ちやマスターは、これくらいのことでは揺らいだりはしないんだな。多分、きっと）

世の中とは不公平なものらしい。本当にしみじみと、そう思った。

少々いじめていたヴィクトリアに、寮長同様に天から二物も三物も与えられたらしいシャノンがさざりと言った。

「とりあえず、まずはこの魔導剣を試してみたい。明日の放課後、訓練室をひとつ押さえるから、付き合え」

「あ、はい。私も微調整したいです。何か気になるところがあったら、おっしゃってください」

魔導具というのは、作ってお客さまに納品すればおしまい、というものではない。

こまめなアフターケアをにこにこ笑ってこなしてこそ、新たな顧客に繋がる――というのが、母の遺したありがたい教えのひとつである。

* * *

翌日、ヴィクトリアは周囲に気づかれないよう注意を払いながら、魔導具の訓練棟に向かった。使用者プレートにシャノンの名前がかかっている一室に、ノックして入室する。

そして挨拶すべく顔を上げたところで、跳び上がり後ずさった。その拍子にごん、と景気よく壁に頭を打つ。

「〜っ！」

かなり衝撃を受けた頭を抱え、うずくまる。

そこに、くっくつとシャノンの笑い声が聞こえてきた。腹立たしい。

「予想通りって言っちゃ、予想通りの反応だが……。何も、そこまでビビらなくなつていいだろう。なあ？ リージェス」

「……ああ」

不機嫌極まりない調子でぼそつと短く返したのは、最近ヴィクトリアが全力で接触を避けていた黒髪の寮長さまだ。

彼らが腐れ縁という名の友人関係にあることは、すでに知らされていた。

それなのに、この可能性を少しも考慮していなかった自分が情けない。

新しい魔導剣の試用を兼ねた訓練であれば、気心の知れた友人を連れてきてもおかしくないではないか。

一瞬、このまま回れ右をして帰りたいくなる。だが、仮にも魔導具職人を目指している身としては、それはできない。

結局、ぼそぼそと挨拶を口にして、訓練室のすみの安全圏で膝を抱えた。

そんなヴィクトリアに苦笑をにじませたシャノンと、無表情に視線を逸らしたリージェス。

ふたりが並んでいるところを、一度でいいから見てみたいッ！ などという煩惱は、すでに遠いお空の彼方に消えていた。

リージェスの絶対零度の眼差しにきゅんきゅんときめいてしまう方も、この世のどこかにはいらつしやるのかもしれない。

けれど、少なくともなんの後ろ盾もない平民のヴィクトリアにとっては、ひたすら恐ろしいだけだ。

ここはもう、リージェスの存在は極力意識から排除して、お客さまであるシャノンだけに集中しよう、と決意した。

シャノンが部屋のまん中で、ポジションをとる。

——昨日作ったばかりの魔導具に、彼が魔力を注ぎこむ。

それと同時に光が溢れ、白銀に煌めく剣がシャノンの右手に握られていた。

（おおう。我ながらいい出来ではないですか）
剣は、所有者であるシャノンの意思を反映するようになっていく。恐らく、彼が普段から慣れ親しんでいる剣の長さや重さを忠実に再現しているだろう。強度や反応速度に関しても妥協はしていない。

ただし、ヴィクトリアの趣味によりデザインは少々優美だ。

どうせなら、イケメンにはキレイなものを持つていただいて萌え萌えしたい。乙女として当然の欲求だと思う。

とはいえ、あまりごてごてしたものは好きではない。

刃には強度を失わないぎりぎりの薄さと細さを持たせ、柄のバランスを考慮して全体の均整を取

る。柄の根元に配置した魔導石には、シャノンの指輪に彫りこまれていたラング家の家紋を刻んで、アクセントにした。

そのデザインのベースにしたのは、母の形見の飾り剣だ。

シャノンが実戦で使うことを前提として設定したため、母のものは多少違う。

それでもやはり、イケメンが好みの武器を持っている姿は、実に萌えるものである。

ヴィクトリアは、内心ぐふぐふと不気味な笑いをこぼす。

すると萌えの対象であるイケメンが、何度か剣を軽く振った後、無言で近づいてきた。ヴィクトリアは慌てて立ち上がる。

「あ……何か不具合でも——」

「ヴィクトリア・コーザ。……『楽園』卒業後の希望は、故郷に戻って生活魔導具作製を生業にする、だったか？」

妙に平坦な声である。ヴィクトリアは首をかしげた。

「はい。それが何か？」

シャノンは、それはそれは麗しい笑みをにっこりと浮かべた。

「ふざけんな？」

「……へ？ いだだだだ、痛い痛い痛いーっ！」

彼はがっしとヴィクトリアの頭を鷲掴みにし、ぎりぎりど力をこめた。あまりの強さにヴィクトリアは悲鳴を上げる。

「やかましい！ ほとんど独学でこんっだけの魔導剣を作れるガキが、田舎で生活魔導具作りなんてはじめてみる！ あっという間に厄介な連中に目をつけられるぞ！ 監禁されて、強制魔導具作製人生まっしぐらだ！」

「ええええええっ！ それはいやです！ なのでこの件については他言無用ということをお願いします！」

「手遅れだ！ こっちには武門の貴族として、有用な人材を発見したら即確保する義務がある！」

ふんぞり返って言うシャノンの向こうずねを、力一杯蹴飛ばしてやりたい。恐ろしいので、思うだけで行動には移せないのだが。

うーうーと涙目になりながら、せめて自分の頭をしめつける指を引きはがそうと試みる。

しかし、シャノンのやたらと大きな手をかりかり引っ掻くだけで、精一杯だ。

「は、離してくださいー……」

冗談抜きに、痛すぎる。

こちらが本気で痛がっているのが伝わったのか、ほんの少しだけ力がゆるむ。けれど、完全に離してはくれない。

シャノンが、やたらと優しいげな声で口を開いた。

「ヴィクトリア・コーザ。我がラング侯爵家の後見を受けるな？」

「う……受けたら、何かいいことあるんですかあ……？」

めそめそしながら聞くと、シャノンは一瞬あきれ果てたような顔をする。大きく口を開け、それ

から深々と息を吐いて答えた。

「……とりあえず、将来食うに困ることはないぞ」

ヴィクトリアは、かっと目を見開いた。

「よろしく願っています！」

「よし、いい子だー」

シャノンの手が、頭の上でぼんぼんとはずむ。

ヴィクトリアは、目を瞬かせた。

「あの……」

「ん？ なんだ？」

満足げな顔のシャノンに、もしかして、と恐る恐る問いかける。

「今後はラングさまのことを、ご主人さまとお呼びした方がいいのでしょうか？」

シャノンが微妙な顔で固まった。

少しの間遠くを見て、ぼそっとつぶやく。

「……確かに貴族の中には、後見した相手にそう呼ばせる連中もいる。だが、どうやらオレはそう呼ばれると鳥肌が立つタイプらしい。というわけで、今後オレのことはシャノンと呼ぶように」

「わかりました、シャノンさま」

リージェスのことは、きれいさっぱり忘れていた。

* * *

それから数日の内に、後見を受けるために必要な書類はすべて整えられていた。ヴィクトリアはシャノンに言われるまま、それらにサインする。

契約内容は、至ってシンプル。

「困ったときには助けてやるから、皇都から出てどこかに行くときには必ずラング家に報告しなさいね」というものだ。

一般的な後見がどういったものか、ヴィクトリアは知らない。それにしても随分ゆるい制約だな、と首をかしげていると、シャノンが苦笑した。

「今のおまえは、なんだかんだ言ったところで十五歳の学生だからな。この契約は、おまえが十八歳になって成人するまでだ。契約更新のときには、この三倍は書類が出てくる。覚悟しとけよ」

未成年相手では、いくらお貴族さまでもそう無茶なことはできないらしい。

何が待ち受けているのか心配だったヴィクトリアは、若干ほっとした。

ラング侯爵家に後見してもらうと決まったが、だからといって『樂園』での学生生活に変化があるわけではない。

後見してもらったと話す相手もない。

そんなことになったと知れたら、やつかみや嫉妬(しつと)的にされてしまうかもしれないから、かえってよかった。

何しろ、優秀なリージェスと唯一(ゆい)対等に接することのできるシャノンだ。彼もまた、生徒たちの憧(あこが)れの的(まと)である。

……男同士で憧(あこが)れたの崇拜(すうはい)だのという話になるなんて、ヴィクトリアには理解不能だ。昔、近所に住んでいたお姉さまに、怒濤(どとう)の勢いで理解を示している方がいたが。

でも、そのあたりに今ひとつうといヴィクトリアは、「なんか、あんまり近づきたくないのですよ」となってしまう。

一步『楽園』の外に出れば、この皇都にはきれいな女性も可愛い少女もいらっしやるというのに、なぜリージェスたちに熱い視線を送るのか。

ガチンコ勝負をしたらひと捻(ひね)りにされそうな危険物をうっとり見つめていたとは——ひよっとして彼らは、別の意味でちよつぱり近づかない方がいい人種なのだろう。

怖(こ)すぎる。

まあ、貴族の子弟のほとんどが親の決めた婚約者と結婚すると決まっているらしい。それを考えれば、将来を考慮することのできない女性に声をかけるといっても、切なくなるのかもしれない。

そんな風に、ヴィクトリアはどうにか自分を納得させられる理屈を捻(ひね)り出すことに成功した。

平民って自由でいいな—と思いつつ、ふたたび時計店へと足を向ける。

大音量目覚まし時計を作るために、手持ちの魔導石では力が足りなかったからだ。

今朝の点呼に、危(あや)うく遅刻しかけてしまった。

後見が決まった直後に罰則のトイレ掃除を受けては、シャノンに顔向けできない。

(でもな—……将来設計がここまで変わると、さすがにちよつと落ち着かないなあ)

あれからシャノンの説明を受けたところによると、ヴィクトリアが母から学んだ魔導具作製(じょうぞう)の実践(じけん)論は、『楽園』の四年間のカリキュラムを充分網羅(もうら)しているらしい。

もちろん、新しい理論や方法論は次々と出てきている。

学年が上がって最新の知識を学ぶ機会が増えれば、今までのように首席をキープするのは困難になるだろう。けれど、少なくとも生活魔導具職人として生きていくには、充分なのだとか。

こんなことなら、構築した術式を魔導石に付与(ふよ)する技術を学んだ時点で、故郷に帰っておけばよかった。しかし悔(く)やんでも後の祭りだ。

ヴィクトリアは、怖いのも痛いのも大嫌いなのである。

戦闘実技の授業もいやだし、「戦うため」の魔導剣や武器系魔導具なんて本当は作りたくない。

——だけど、もうわかっている。

何も考えずに飛びこんでしまった『楽園』が、いずれ国——皇国軍の中枢(ちゅう)を担(にな)うエリートを育成する機関であることくらい。

もちろん、実際にそうなるのは、トップクラスの成績を修めているリージェスやシャノンのような、極(ごく)一部の生徒だけなのだろう。

けれど、ほかの生徒も将来軍属になることを当然と考えている者ばかりだ。

その学校に、「将来は田舎で生活魔導具を作って生活したい」なんてとぼけたことを考えて入学した自分は、ただのおぼかだった。

それは、さまざまな戦闘関連の授業の中で、もう何度も思い知らされた。……ここ二十年ほど、戦らしい戦はなかった。それに、皇都の衛兵たちも『楽園』が実際はどんな機関か知らなかったのかもしれない。

でも、ヴィクトリアにここに行けばいいとすすめてくれた彼らは、絶対に平和ボケしていると思う。

（いや、いいんだけど。衛兵さんが平和ボケするくらい、今の皇都が平和だったのは、いいことだとは思うんだけど。……わたしの人生設計の狂い具合が、ちよつと気になってるだけでね！）

とりあえず、いつかまたあの衛兵たちに会うことがあったなら、背後から膝かつくんしても許されるに違いない。

そんなことを考えながら、ヴィクトリアは街を歩く。そのとき、ふとすぐそばのショーウィンドウに飾られている品に目を惹かれた。

小洒落た小物や生活雑貨を扱う店らしいが、ちよつとした生活魔導具も売っているようだ。

それらのお値段は——恐らく、皇都価格というものなのだろう。ヴィクトリアが見慣れた値札とはかなりの差がある。

けれど、洗練されたデザイン、魅力的な性能ともに、実にすばらしい。こういうものを自分で作れたなら楽しくて仕方がないだろうな、と思うものばかりだ。

いいなー、いいなーと心の中でつぶやき、うつとりと眺める。

そこに、くすくすと笑う可愛らしい声が聞こえた。

振り返れば、それはそれは愛くるしい七、八歳ほどの少女がいる。

どこか儚さを漂わせる、繊細な風情。空気にとけそうな淡い金髪。鮮やかな碧眼がよく映える、

透き通るような白い肌。

ちよつと現実離れた雰囲気の可憐な姿は、まるで宗教画の中から天使が飛び出してきたみたいだ。

ヴィクトリアはあまりの可愛さに、目を疑った。

これは本当に生きた人間だろうか、誰かの作った魔導人形じゃあるまいな。

そう勘ぐってしまったけれど、どうやら本物の人間らしい。

身なりや、付き添いの女性がそばにいるところを見ると、随分いい家柄の子のようだ。

少女は少し困った顔をして笑いをおさめると、白いリボンをつけた頭でべこりと会釈した。

「ごめんなさい、笑ったりして。でもわたくし、男の方が可愛らしいものを見てうつとりしているところなんて、今まで見たことがなかったのですもの」

少女の言葉に、ヴィクトリアは思わずほほえんで答えた。

「わたしは子どもの頃から、こういうったものを見るのが大好きなもので……。お見苦しくて、申し訳ありません」

軽く頭を下げると、少女は慌てて手を振る。